

第 19 回「人生用心ノート（一）」

知識と知恵と。

君子三戒。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第 19 回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「人生用心ノート」と題しまして、その第一回をお話しします。

タイトルの「人生用心ノート」とは、ちょっと大げさですけども、我々は己の一生において、いろいろなことに出会います。そういう場面で、自分はどうすればよいか、方向に迷うことがあります。そこで、人生を自分の知恵だけで考えるのもいいのですけれども、参考になる話を知っている、それぞれの場面で応用できます。

そういった参考になる話というのが、古典の中には多くあります。『論語』もその一つです。

『論語』の中には、様々なエピソードがあります。そのエピソードは、良く読むと自分にとってプラスになるところが多いかと思います。

『論語』を読むときは、物語として読む一方、自分の人生の用心のことばとして読んでいくということも、また有り得るわけです。

それを一般化して申しますと、「知識」と「知恵」ということになるでしょう。

【知識と知恵と】

普通は、知識を求め、たくさん集積することで精一杯になります。しかし、知識というのはたくさん持っていて、それだけに終わってしまえば、何の働きにもなりません。意味もありません。

知識を活用して生かす。ここに古典を読む大きな意義があります。

それは知恵です。知識を本^{もと}にして知恵として生かす。

今回は、その一、二例をお話しします。

さて、この話は突然ではありません。人間が絶えず求めてきたことであります。

しかも、最近では、もっと大掛かりになって現れてきました。

「能力開発型」

「課題解決型」

このようなことばを最近の新聞などでお読みになったかと思います。

近い将来、大学の入学試験の大改革が行われます。どういうことか、ポイントだけを申します。

これまでのように、知識ばかりを試すテストではなくて、能力を開発できるような問題にしな

さい、あるいは課題解決するというような形で質問を作りなさい、そういったことが謳われて

きたわけです。従来でも能力開発、課題解決を求めた問題は多かったわけですがけれども、とも

すれば、現代は偏差値で並べる、つまり知識集積型の者が有利な試験であることは事実です。

そこで知識集積型だけで、人間を判断するのではない方法で、選りなさいと、正式な指示があり、

今、全国の大学では、この大学入試改革を目指して、様々な努力しているわけです。

要するに、それは「能力開発型」、「課題解決型」です。

早速、このようなことを自分のことばにして、出しているのが塾です。

ある塾では、それを「自考力」と言って、宣伝しています。

「自考力」ということばは、私も初めて見たものですがけれども、独自路線を示そうとしている

のですね。こういったことがすでに始まっているのです。

実は、我々は「能力開発」、「課題解決」を、いつもしています。これまでの入学試験では、か

なり欠けていたことはある程度当たっているのですね。

さて、人生用心する場合には、「問題解決型」というものを理解する必要があると思います。

ただ、具体的な問題がないと、立ち向かっていくことは難しい。

そこで、基本となることがある、と孔子は言っています。

くんしさんかい
【君子三戒】

三つの戒めということ述べております。これが基本である、というのが孔子の考えです。

「君子三戒」、まず、こういうところからしっかりと、自分の在り方を決めていきなさい、という事です。

この「君子三戒」、ある意味では、人間の一生の在り方を言い当てている真理があります。それでは、読んでみましょう。

冒頭の「孔子曰く」これは前にも言いましたが、孔子と名前のある文は、直接の弟子が聞いたわけではないようです。弟子の弟子、孫弟子くらいでしょう。少し関係が遠い。それだけに、伝説的なことばとなっています。

こうしいわ くんし さんかいあ わか とき けっきいま さだ これ いまし いろ あ
「孔子曰く、君子に三戒有り。少き時は、血気未だ定まらず。之を戒むるは色に在り。

そ そう およ けっきまさ つよ これ いまし たたか あ
其の壮なるに及びては、血気方に剛し。之を戒むるは闘いに在り。

そ お およ けっきすで おとろ これ いまし とく あ
其の老ゆるに及びては、血気既に衰う。之を戒むるは得に在り」(季氏第十六)

孔先生はこう、おっしゃった。「君子に三戒有り」真っ当な人間は、三つの戒めということを守っていかねばならないのだ、と。

このように三つの何々という言い方は多いですね。覚えやすいし、三つで大体、ほとんどを言い表すことができます。これはごく常識的な表現です。その三つを順番に読みましょう。

「少き時は、血気未だ定まらず。之を戒むるは色に在り」

「少」というのは、若いという意味です。少年、少女と使いますね。それは若者のこと。

少年と言いますと、我々は小学生くらいを思いますが、そうではなく、青年も含みます。

若いときは「血気未だ定まらず」。これは身体的な問題です。元気がありますから、生物的在り方、性欲があります。若いときは恋愛問題に気が行きがちです。まだ安定していない、若者だから無茶をする、などと言います。

本当でしょう。やはり、肉体が精神を抑えることができない。注意しなくてはいけないのは、「色に在り」。「色」は恋愛です。平凡なことばですが、なかなか当たっていますね。

若いとき、青年期は色欲に気を付けろ、ということです。

「其の壮なるに及びては、血氣方に剛し。之を戒むるは闘いに在り」

「壮なる」は大体、今日にいえば、30代から40代を指します。

孔子の頃の平均寿命、人間の一生は30年でした。当時としては普通です。たとえば、自分は六代目であると、いうと、6×30年、代は大体180年ほど続いているわけです。

「壮」働き盛りです。壮年期になりますと、血氣は安定して、しかも強い。

己の欲望、この場合は性欲ではなく、社会的な欲望が出てきます。権勢欲です。

自分は力を持ちたい、立派なもの作ったり、命じたり、そういう権力、権勢に関心を持ちやすい。

これも当たっていますね。30代から40代になると、社会的な活動の盛んなときですから、権勢欲が生まれてくる。これが危ないと言うのです。

他者との関係において、権勢欲が強いと、よほどうまくリードしなければ、失敗する。こういうことです。壮年期は、権勢欲に気を付けなさい。青年期の色欲、壮年期の権勢欲、これはどんな人間にも当てはまりましょう。さて最後は、老年期です。

「其の老ゆるに及びては、血氣既に衰う。之を戒むるは得に在り」

老年期においては、肉体的に自由になりませんし、氣力も衰えます。当たり前のことです。するとこれが危ないぞ、というわけです。

「之を戒むるは得に在り」「得」物欲です。物欲が強くなる。

老人になると、失うことばかりです。まず健康、社会的には、もう引退しますから、権勢欲も失います。

それから、はっきりいいますと、友を失っていく。先輩や友人が病気などで亡くなっていく、あるいは家族もそうかもしれませんね。

人間は感情がありますから、その喪失感が人間を憂鬱にさせていくわけです。老人はいろいろなものを失っていく、その喪失感が元気を無くさせる。そうしますと、取り返そうとします。

失いたくないと思い、しがみついていくわけです。その場合、人間にしがみつけば、相手は逃

げていくかもしれませんが、物ならば逃げない。

そこで老人は物欲が強くなるわけです。物をしっかりと握って、失うまいと努力する。これが老人になっていくということです。このことが失敗であると言っています。

物欲が強いと、周りから人間が去っていきます。ますます人を失っていくのです。そしてまた失うまいとして、物欲が強くなる。これは危険であると、誤りであるということです。

青年期、壮年期、老年期、人間は誰でもそこを通っていきます。

青年期における色欲、壮年期における権勢欲、老年期における物欲、こういうものに注意して生きていけという一般論です。

おそらく孔子は、経験上得たこととして、弟子達に話をしたのでしょう。

現実に孔子自身にこういうことがあったのだと思います。

事実、孔子は、壮年期に強い権勢欲があり、そのポストを得ようとあがき、他の人とも闘って、という騒動も起こしております。

ですから、己の人生を省みて、このような反省のことばが出てきたように思います。

とくに、壮年期のこととっております。

これも人生用心ノートとして、いいでしょう。

『論語』には人生における、様々な出会い、出来事に対して、どのように切り抜けていくかについて、ずいぶんと述べております。ですから、みなさんは『論語』を一つの物語として、孔子という人物が経験した人生の物語としてお読みになりますと、人生用心ノートとして、書き付けていくことができるのではないかと思います。

今回は「人生用心ノート」の第一回をお話ししました。